

# 1920年代の学生と住居

## —— 東京帝大新人会における「合宿所」の考察から

後 藤 美 緒

### 1. 問題関心 —— なぜ、新人会員たちは「合宿所」を営んだのか？

現代日本社会において、人々が定位家族から離れる第一歩を提供するのは就職と高等教育機関への進学であるといえよう。彼／彼女らは通学や通勤の不便な場合、親などの保護者のいる自宅ではなく別の部屋を借り、新生活を開始する。また、進学に対して自宅を離れることを条件の一つにする姿もかつて見られた。そうした離別は、高等学校卒業後に多く開始される形態であり、現代では毎年4月によく見られる光景である。

進学のために家族とはなれて暮らすという選択は現代社会に特有の現象ではなく、今日に繋がる起源は明治初期、すなわち1860年代まで遡ることができる<sup>(1)</sup>。明治以降整備された近代学校制度は、学校数を限定したため、絶対的に数の少なかった上級学校に進学するためには人々は幼いうちから親元を離れ、親類宅や教師宅に間借りすることや寄宿舎や寮といった学校附帯の施設に入居する、もしくは金銭を仲立ちにして生活の場を提供する下宿屋に居住することになった。多くの学生にとって進学することは郷里と離れ暮らすことを意味していたといえる。

こうして進学した彼らは移動した先で新たな生活の規則を身につけることが求められた。そのため、高等教育機関への進学によって人々はこれまでの規範を捨て、彼ら固有の文化を創出することが予見される。さらに、彼らが居住する場は寝起きする場というのみならず別の意味を持つことも考えられる。

学生たちを迎え入れる都市、とりわけ東京市においては人口増や衛生観念の普及、建築技術の発達によってこれまでとは異なる住宅が造出されてきた。1923年の関東大震災の罹災後、表参道に同潤会アパートが建設された。そして上野や日暮里、郡部であった渋谷や深川にもアパートが建設された。そこでは人々が集合して住みながらも家族や個人といった私的空間は守られる居住空間が生み出された<sup>(2)</sup>。都市の側において人々のニーズに応えた居住空間を用意し始めたのである。

明治20年代、すなわち1880年代末期になるとこうした学生たちに向けた指南書兼案内書の発行が隆盛をみるが、大正期になると制度改正によって学校数が増え、東京市内には学生たちが溢れた。彼らの中には従来とは異なる形態で居住することを営むことも出てきたことが予想される。なかでも、戦前の学生運動団体であ

る東京帝大新人会（1919-1929、以下新人会）は、寄宿舍や下宿でもなく、自らの名義で戸建てを借り、ある者は寄宿舍や下宿から転出し、またある者は上京後の住まいに決め、そこから大学や争議に出かけた。会員以外の定住を認めず、食事の調達も縁故者に依頼した。そしてしばしばその集合生活は継続の危機を迎えながらも会の解散まで続けられた。そうした集合生活を彼らは「合宿所」と呼んでいる。では、なぜ彼らは「合宿所」での生活を選択したのであるうか。学生への社会的な関心を高めた新人会<sup>(3)</sup>の居住空間を確認することは、ひるがえって彼らがともに生活することで生み出そうとした新しい知の編成の在り方を確認することができると考えられる。

本稿では、戦前の学生たちの居住形態を確認するとともに、そこで営まれた学生たちの生活を描出することを通して、形成された知の在り方を明らかにする研究ノートとしたい。

## 2. 先行研究と分析視角、アプローチ

### 2-1 先行研究——戦前の学生たちと住宅をめぐる研究

戦前の学生たちの住宅と生活実態を明らかにしようとする試みは、その数が少ないものの蓄積されている。それらは大別すると、第一に統計資料をもとに戦前期の学生文化を明らかにしようとする試み〔加藤善子 1999, 竹内洋 2001<sup>(4)</sup>, 末富芳 2007〕と、第二に住宅を通じて求められた学生像を明らかにしようとする試みがあげられる〔滝浦文彌 1926, 前田俊一郎 2002〕。

統計資料をもとに戦前期の学生文化を明らかにしようとする試みは、昭和初期に各高等教育機関ではあいついで半構造的質問式法で行われた学生生活調査を資料もとに分析を行ったものである<sup>(5)</sup>。加藤によればこうした調査は18種類近く行われた<sup>(6)</sup>。

なかでも学生の住宅に着目した研究として、教育社会学者末富の研究があげられる。経済階層による学生文化の検証を進める末富は、これらをもとに昭和初期の帝大生たちの5割が貧困層であったことを示した。末富はとくに経済状況に着目することで、学生たちの住宅といった基本的な生活状況に光を当てることになった。しかしながら、住宅が学生たちに与えた影響については検討の対象外になっている。また、なぜ彼らがそうした形態を選択し、意味づけていったのかという点についても十分に検討されていない。

一方、都市に点在した下宿や寄宿舍といった集合住宅に期待された機能を検討する研究があげられる。その嚆矢は官立高校を辞し、民間の教育家になった滝浦文彌によって上奏された寄宿舍研究といえよう〔滝浦文彌 1926〕<sup>(7)</sup>。教育上の観点から寄宿舍の必要性を感じた滝浦は、国内における寄宿舍の分類とそれぞれが果たした機能と短所、また諸外国の寄宿舍を紹介し、今後の教育と寄宿舍の在り方について網羅的に論じている。彼の研究は1920年代の学生たちの居住実態を把

握する資料的側面と教育観を図る上でも貴重な研究である。

この住宅が持つ機能的側面に着目した民俗学者前田俊一郎は東京都内に点在する地域を単位とした学生寮が、「故郷」あるいは「同郷」意識の再確認の場として機能していたことを明らかにした〔前田 2002〕。1880年代からの長い歴史を持つ高知県の寄宿寮をフィールドにした前田の研究は、今日における学生たちの共同生活の様相を描出しながら、寮歌（歌詞）、学生寮それ自体、OBに向けた機関誌、寮監や寮母、年間行事のなかでも故郷の祭りが共同性を構築するための装置であることを暗示した。集合して住む人々が作り出す秩序を捉えるにあたってこうした視点には示唆されるところが多い。しかし、住居が持つイデオロギー的側面が強調されるあまり、居住する人々が住むことを通じて形成しようとしてきた営みについては十分に検討されていない。

さらに、同じ同郷者のための学生寮を分析した地域社会学者の高田知和は、学生寮が学生・生徒のみならず、さまざまな主体が出入りする重層的な関係によって持続していることを明らかにした〔高田 2006〕。とりわけ食というもっとも生存にかかわる局面に着目することによって、集合住宅の機能的側面から人々の営みへ、いわば、そこに関係する人々がどのように住宅を意味づけていたかという新しい視点を提供した。

以上を整理すれば、人々の住まいと住み方をめぐっては住宅という形態と、住居という住宅への意味付け、そして居住という実際に住み続ける実践の三極が想定できる。なかでも、住み続けることは日々の営為に依拠するため、住まい始めた当初において特定しない事件や事故が生じ、結果的にその場の意味を変えることが予想される。すなわち、住居は理念といいかえられるだろう。具体的にどのような共同生活が営まれたかを分析の俎上にあげ、その中で会員たちが共に暮らそうと試みてきたことを問う本稿はさしずめ、新人会における住居を明らかにする試みと位置づけられる。

## 2-2. 対象と資料、アプローチ

本稿で分析の対象となる新人会は、第二次世界大戦以前の学生運動において、最高の権威と最大の組織力を持った学生団体といえる。新人会は戦前の近代学校制度において頂点に位置づけられる東京帝国大学の在学生、卒業生を中心に、帝大教授で法学者の吉野作造に傾倒した人びとが組織した活動団体であり、理論探求と実践活動を中心に、その達成を目指した活動を継続して行った団体であった。彼らは学内外での演説活動、機関紙の発行・運営や翻訳といった執筆活動、関東大震災を契機に作られたセツルメント事業における医療活動、労働争議の応援や労働学校の運営まで、多岐にわたる活動を展開した。そしてそれらを支えるために様々な読書活動を行った。

しばしば彼らはそうした活動を自らが寝起きした場所で行っていた。とりわけ集合して読書する研究会が行われたのが、彼らが集団で生活をとにした合宿所

である。

合宿所への入居は新人会に入会していることが前提とされていた。活動後期になると入会には紹介者を必要とし若干の審査があったが、実践活動もしくは研究活動に関心を持つ者が新人会に入会できた。高等学校以上の学生の全国組織を形成した彼らは高等教育機関在籍者の中での知名度が高く、高校在籍時から活動していた者のなかには入学とともに入会し、上京とともに合宿所に住所を定めた者がいた。また、大学で活動を知り入会した者は下宿などを引き払い合宿所に転居した。居住期間の長さは数か月から4年と異なるものの、会員たちの多くはここから大学に通学し、労働学校へ通勤し、労働争議の応援に出かけている。

合宿所での生活を明らかにするにあたって、本稿では当時の状況を描いた様々な手記（回想録、自叙伝、追悼文集）を用いる。彼らの多くは在学中から旺盛な執筆欲に取りつかれ、大学卒業後は執筆を生業にする者が多く、随筆や社会批評などで自身の経験を振り返って書き込むことが多く資料が豊富にある。公開を予定して書かれた手記には、記憶間違いといった問題だけではなく、虚栄心のための事実の誇張や隠ぺいなどが想定される。できる限り多くの手記を収集し、同一の状況を「重ね合わせる」ことがこうした状況を回避させるために有効である〔森岡 1992, Keniston, Kenneth 1971=1977〕。また適宜、関係者による著作も用いる。

次節以下ではまず、戦前における東京市下に集まった学生たちの住宅を確認し、一般にそうした生活が清濁併せ持つ機能を持っていると認識されていたことを確認する（3節）。その上で、新人会員らの記録から彼らがしばしば共同生活を遂行し、それが従来の形態と異なること、また実際に彼らにとって「合宿所」でどのような生活が営まれていたのかを再現することを試みる（4節）。そして、新人会にとって合宿所が、研究者や運動家になるための身体を形成する場であり、当時の知的エリートとは別に個別の学生たちによるサロンとして機能していたことを指摘して結びにかえたい。

### 3. 東京市下の学生たち——「自治」と墮落、退廃

#### 3-1. 都市に集まる学生たちと住宅

大正期から昭和初期の東京市を観察し続けた建築学者で民俗研究家の今和次郎は、東京市が都市の様々な要素を持ちながら、主要な構成要素として学都であることを指摘している〔今 1929a, 1929b〕<sup>(6)</sup>。

1872（明治5）年の学制発布以後、日本の近代学校教育制度は階梯的に整備された。なかでも東京市はその頂点におかれた官立の東京帝国大学が所在し、1876年には法文理医工農学科の学生約100名が、キャンパスがおかれた本郷周辺に起居することになった。その人数は年々増え続け、1915（大正4）年からは卒業生が例年1000名を超えるようになり、ますますその人口は増加した。また、帝大に

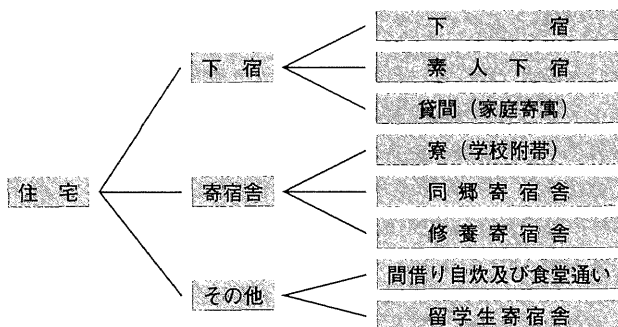
隣接して帝大入学の重要な足がかりとなる第一高等学校（以下一高）が整備された。他にも、近辺に帝大に準じる各種の私立学校が次々と創設された<sup>9)</sup>。さらに、そうした学校を受験、入学するために、入学以前から東京市内に在住しながら試験勉強を試みて地方から上京する青年も少なくなかった。予備軍を含めた学生たちが東京市内に集中し、街を特徴づけるようになっていったのである。

同時に彼らの衣食住を提供する空間も順次整備されていくようになる。市内には単身者や学生を目当てにした食堂や銭湯が営業していた。また、明治20年代から30年代にかけて、上京し遊学する青年たちに向けた指南書兼案内書が流行し、未来の学生たちに向けた東京での住宅が紹介された。下宿や寄宿舍、同郷者のための寮である。

さらに30年を経た1926（大正15）年には民間の教育家滝浦文彌による寄宿舍研究が上奏されている。彼によれば1920年代後半には学校の増設や交通機関の発達による通学区域の縮小によって、「寄宿舍の自然的縮小、自然的消滅」〔滝浦 1926：2〕状態にあったと指摘される。その上で、寄宿舍とよばれるものにいくつかの種類があることを紹介している。それは学校を基礎として校内と校外、家庭の一部屋を間借りする家庭寄寓（貸間）とに分かれていた。校外のものとして同郷者寄宿舍、修養寄宿舍があげられた。そのほかに言及されているものが、間借り自炊及び食堂通い<sup>10)</sup>、留学生寄宿舍などが紹介されている。彼に紹介された東京市内で営まれた学生たちの住宅を整理すると以下のように分類できよう。

ここでは、会員たちが合宿所入居以前に営んでいた住宅である下宿と寄宿舍、とりわけ寮について簡単に紹介したい。なぜなら、東京市で暮らす学生一般の住宅を確認すると共に、会員たちの多くがこうした形態を経験したうえで合宿所を営んでいることから、「合宿所」がもつ機能が鮮明になるからである。

図1 学生たちの住宅



滝浦（1926）の紹介したものを筆者が整理

## ① 下宿

縁故のない上京した若者たちを迎えたのが下宿である。それらは下宿、素人下宿、貸間（家庭奇寓）<sup>(11)</sup>に分類できる〔滝浦 1926〕。

下宿運営には届け出が必要であったが、届け出なしで運営されたものも多く、それらは素人下宿と呼ばれた。学生たちを受け入れる住宅である下宿は、なかでも本郷、神田、牛込、小石川などの地域に集中した。基本の賃料は一畳につき2円から2円50銭が相場で、食費3食付きで20〜35円程度、たとえば6畳3食付き32円であったという。当時の物価は勤労者や学生相手にした公衆食堂で朝食が一食10銭、昼・夜食が15銭で得られ、公衆浴場の入浴料は大人4銭、子どもは半額であった〔滝浦 1926、今 1929 b〕。早稲田の理工学部の学生を観察した今は、彼らの仕送りが6畳に住むもので月70円、4畳半では60円であったと記録している〔今 1929 b〕。衣食住にかかわる生活費だけではなく、書籍などの購入や交際費もこの中には含まれていたと考えられる。

下宿が各種の寄宿舎と異なるのは金銭を仲立ちに経済利得に基づいて運営され、教育上の訓育には注意が払われない点である。食事や風呂は提供されるものの寮監や舎監、寮母といった監督者は存在せず、おのおのが自らを律することが前提とされた。そのため、互いの部屋を訪れることは容易であった。正岡子規は下宿先で集まった級友たちと「闇汁」に興じたことを『闇汁図解』に記しており、下宿は気のおけない仲間が集う場であった〔正岡子規 1899〕。また寮などと異なり、個室が確保できた。人々が集合して生活しながらも個別化された空間に住まう下宿屋は、裁量権が個人にゆだねられ、物理的形態によらず個人化された空間であったと考えられる。

## ② 寄宿舎

寄宿舎には寮、同郷寄宿舎、修養寄宿舎が存在した。滝浦の整理に依拠し、設立主体と設立趣旨、東京市下におかれた寄宿舎数をまとめればつぎのようになる。

学校がもうけた寄宿舎である寮においてはその設立趣旨は、第一に安全で経済的な生活所を供すること、第二に訓育指導の便を得ることである。だが、1920年代後半において士官学校や兵学校といった軍事上の目的を有する学校や、師範学校、感化学校といった特殊な教育機関以外に寄宿舎を置くところはなかった。唯一、第一高等学校（以下一高）が全寮制を標榜し、明治23年（1890）からの長い歴史を持つ。しかし、諸所の理由により全校生徒を収容することができない状況に置かれている<sup>(12)</sup>。

同郷寄宿舎は同郷の有志が募金をして設立、あるいは旧藩主の私財による建設、学生による設置したものであり、その利点として第一に下宿者や素人下宿と比べて風紀上、経済上益があること。第二に故郷に対する温情を培い、郷党を思う濃かな情念を養うことができること。第三に同郷の名士や学者に接して教訓や用例を受ける機会があること、第四に後進誘導の精神を持つに至ることがあげられる。

滝浦によれば東京市下にはこうした寄宿舎は比較的多く、収容人数は15名から150名とさまざまであったという<sup>(13)</sup>。

修養寄宿舎は学校や地域の相異を超え、宗教的または倫理的な団体によって建てられたもの、またそうした目的に奉仕する個人によって建てられたものを指す。その利点として、第一に向上的、犠牲的精神が高く、良い環境を作ること。第二に人数が少なく家庭的であること。第三に学校や出身地域の偏執にとらわれないため、偏狭な心持が薄く、切磋琢磨できることがあげられる。仏教、キリスト教がそのおもな設立者であり、全国の高等学校に作られた。東京帝大にも帝大仏教青年会、帝大基督教青年会の宿舎が作られている<sup>(14)</sup>〔滝浦 1926〕。



写真1 寄宿舎の内部「第一高等学校自治寮六十年史」から転記<sup>(15)</sup>

基本的に部屋は相部屋で構成され、一室に2～8人が起居をともし、個人机が割り当てられ、布団など身の回りの者を置く場所は指定されていた。だが、仕切りがあるわけでもなく個人のスペースが確保されていたわけではない。写真1はその様子をよく伝えてくれる。

これらの住宅で興味深いのは管理の不可視化ともいうべき状況が行われていたことである。各寄宿舎においてそれぞれは理念を遵守することが求められ、それを監督する舎監や寮監、寮母がおかれた。しかし他方で、一高をはじめ各高等学校では「自治」制を標榜し、管理者と渡りあうことが行われていた<sup>(16)</sup>。たとえば、一高では寮生から選出された寮委員会が寮生活を管理し、校長の命令や学校側の方針は寮生の意思を代表する総代会を通してすることが規定されていた〔一高同窓会 1994〕。すなわち、監督者に対して対抗的でありえたが、しかし現状を維持するために規則に抵触しない程度に自らを律することが求められていた。

会員たちの多くは高等学校時代に寮に入るものも少なくなく、さらに1920年代の東京帝大では寄宿舎が敷設されていなかった<sup>(17)</sup>ため、同郷寄宿舎や修養寄宿舎に入ることが多かった。合宿所入居以前に共同生活を経験した彼らは、その際守るべき規則を日々の暮らしのなかから身につけていたと予想される。

### 3-2. 「自治」、退廃、事件・事故の現場としての集合住宅

下宿屋や寄宿舎は経済的な面や人脈において利点が多いと認識されていたものの、他方で彼らの生活が放縦、粗野になるとして批判の対象でもあった。

#### (1) 「自治」の弊害

たとえば、その批判の一つに寮生活における「自治」とそこで養われる「籠城主義」があった。

自身の一高時代を振り返り、その弊害を述べながらも、弊害こそが一高の良所を醸造すると述べた佐藤得二の論考によれば、高校生活一般が中学時代と異なっ

た点として以下の点があげられている〔佐藤 1939〕。飲酒、飲食店や喫茶店、映画館などへの出入りが可能になったこと。身なりに関しても注意を受けることはなくなり、夜更かしなど時間の管理は個人に委ねられたこと。さらに自主休講や各種の届け出も個人の裁量で行われるとみなされたことである。そのため、寮は道徳的に不潔であり、総体的に教育的に信頼できる寄宿舎は少ないとふりかえる。とりわけ一高の傾向は「過度」「極端」〔佐藤 1939：193〕に表され、生徒たちは過度に運動し、過度に食べ、過度に読み、過度に遊び、そのなかから過度の友情を培ったという。そうした様々な「過度」が、ゆくゆくは「心広く、体ゆたかな人物を作るのに可なり貢献している」〔佐藤 1939：197〕し、またそうした関係のなかで自ら苦しみ悩むことが、自らの収める道を開いてやることになる述べられている。

行動範囲が拡大し、個々人の裁量権が増し、培われた精神が美徳として経験者たちには記憶されていたのである<sup>(18)</sup>。だがそれゆえに、寮での生活はそこに入居していない者を寄せ付けるものではなかった。彼らが培った意識は「籠城主義」と呼ばれ、批判の対象であった。一高の教師でもあった内村鑑三も例外にもれず、息子の寮生活を垣間見て言葉に詰まったようである<sup>(19)</sup>。

寄宿舎への批判は、そこに住まう人々の営為が、学校や親といった関係者が住宅に期待した意図と異なることから生じたと推察される。「自治」制とは自らの住む空間を快適なものへの意味づける起点であり、理念であったことがうかがわれる。

## (2) 下宿屋と頹廃

第二に下宿は若者たちを貶める場として語られていた。1880年代の遊学を希望する若者たちに向けられた受験雑誌は彼らに東京市内での生活を紹介するとともに、その生活に誘惑が多いことも同時に紹介した。受験雑誌で繰り返される墮落する学生たちの言説には、上京し苦学することが勉強立身の動機を持っていたが、一方で遊学には都会への憧れの扮装という構図があったからだと教育学者竹内洋は指摘する。墮落の要因として雑誌に指摘されたのが娼妓、芸妓、学生の便利を図る洗濯屋、貸本屋、学生を相手にする高利貸し、飲食店、素人下宿屋、男色であった〔竹内 2002〕。

竹内は若者たちの内在的要因と都市の構造という外在的要因を指摘したが、同時代を生きた滝浦の観察からは、さらに受験雑誌に定型化される言説の背景に、下宿屋それ自体にも問題があると認識されていたことが確認できる。それは第一に下宿屋の位置と建築、第二に賄い、第三に娯楽機関の欠乏である。しばしば下宿屋は繁華な場所に置かれ運動ができず、建物内部は採光や換気が悪く、浴室やトイレは不衛生とあった。こうした状況が問題とみなされるのは、「居は氣を移す」のであり、学生たちにとって「大切な城郭」であるためだと説明される。賄いについては米の品質を上げ、副食が粗末なことが学生たちの不満であることが



紹介される。食事の不満は脚気との関係で語られ、下宿の料理は病気を招くと認識されていたと推察される。また日々の食事、とりわけ祝日には献立に変化をもたらすことが「学生たちに限らない慰藉を与える」と記される。食事への期待が語られることは、下宿での生活において他に楽しみがなかったことが推察される。さらに娯楽設備の整備が求められた理由として、現在、下宿屋は単なる「止宿人同志」して、そこにいる人々には「孤独の念」が感じられており、友情の交換ができていないためだと説明する〔滝浦 1926〕。いわば第一の要因は下宿屋のハード面、第二・第三の要因はソフト面に対する問題が語られた。

そうした差異があるもの、両者に共通するのは下宿屋という住宅形態が人々を個別化することが問題と捉えられていたことである。さらに個別化した人々は提供されるサービスや居室の状況でさらに状態を悪くすることも指摘されていた。

### (3) 事件・事故の現場としての合宿所

人々が集合して住んだのは下宿や寄宿舎に限られたわけではなく、また1920年代に合宿所と呼ばれた施設が他になかったわけではない。1920年代の新聞には合宿所の住人として学生、社会人、低所得層があったことを伝えている。たとえば、次のような記事が新聞に掲載された。

読売新聞「合宿所で巡査と娼妓の心中／村田銃を用いて」1923年7月16日付、  
「三千余円の鉄道合宿所あらし」1925年6月4日付、朝日新聞「巡査合宿所のボヤ」1927年7月7日付、「朝鮮人の大乱暴／合宿所を襲い器物破損」1929年1月3日付、「合宿の賄い方で真症コレラ／発病して毎日弁当運び／大恐慌の鉄道官舎」1929年9月7日付。

こうした新聞記事から合宿所は集合住宅を意味し、その入居者は社会的属性によって分かれていたことがうかがえる。社会人に用意されていたものは警察官や鉄道職員のためのものがあり、現在でいう独身寮のようなものがみなされていたようである。学生に関するものは、野球や相撲などのスポーツの練習、強化を目的に集合生活を送る場をさしていた。そうした合宿所は、伝染病が流行したり、火事や盗難、強盗、賭博がひらかれたりするなど、いわば事件や事故の現場と、新聞において意味づけられていたのである。

以上のように、東京市では学生たちが集まり、多種多様な住宅が用意され、そこに住む人々だけではなく、学校や親といった関係者やマス・コミがそれぞれ住宅に意味をこめた。機能的な側面からみたらそれらは費用が安く抑えられる、ネットワークが形成できるなどの利点があった。また、集合して暮らしながらも、そこで営まれた生活は個人的／集团的と幅があった。機能やこうした差異が、ときには弊害と観察されていた。では、こうした状況がある中で新人会はどのよ

うな居住形態をとり、どのような生活を送ったのであろうか。次節で確認したい。

## 4. 「合宿所」という選択

### 4-1 表札を掲げる

会員たちの中では関東大震災を前後にその性質が変わったと公言するものがあり、研究上もその区別がなされている<sup>(20)</sup>。だが、かれらはそうした違いが指摘されたにも関わらず、共同生活を送ろうと試みたことは共通しており、それは当時の学生の居住形態とは異なり特筆すべき特徴といえる。

図2 新人会が営んだ合宿所



東京市区調査会編 (1912) の地図を用いて筆者がまとめた

会員たちの合宿所は大小含めて9つ程度確認される (図2 参照)。独身者を中心に営まれた合宿所の場所と期間は①初期本部兼合宿所 高田村3600番地 (1920～1923)、②牛込一市谷富久町 (1922)、③震災後の大学寮バラック／セツルメント<sup>(21)</sup> (1923/1923～1937)、④桜木町合宿所、⑤森川町合宿所 (1926, 4～1927, 3)、

⑥谷中清水町合宿所（1926、3～1928）、⑦本郷林町合宿所（1927年7月前後）、⑧本郷追分合宿所（1927～1928年）、⑨千駄木町合宿所（1927年前後、森川町の者が移転）である。1923年を境に大学から離れた場所から大学の近くへとその設置場所が移動した。

新人会は1922年以降、会員を学生にのみ会員を限定したため、卒業によって所属人数の増減があった。そのため、少ないときには1つ、多いときには同時に3つの合宿所を運営していた。十数人が同居した合宿所として高田村に開かれた本部兼合宿所、谷中清水町合宿所、森川町合宿所があげられる。写真2は新人会1周年を記念して高田村の本部で取られた写真である。庭や木々が見受けられ、また集合写真を撮ってもまだ余りあるほど余白があり、広い邸宅であったことがうかがえる。谷中清水町の合宿所もまた「清水町の通りの黒い門をくぐると踏み石の敷いてある路地のような道の突き当たりが格子戸の玄関だった。何しろ大きな二階家で、南側には広い庭が手入れもされずにあった」〔林睦夫 1967：176〕。高田村の合宿所は会員の一人宮崎隆介の父滔天が管理していた中国人革命家黄興宅を、後者は会員の大河内信威の父大河内子爵の持家を安く借りうけたものである。そうして廉価で借りたにもかかわらず会員たちは仕送りの多くを会の活動資金にあてていたため、会員たちはしばしば賃料が払えなかった。



写真2 日本社会運動資料機関紙編から転記<sup>(26)</sup>

間取り図が判明する合宿所は少ないが、森川町合宿所は二階建て、一階に六畳と三畳、二階に上がる階段が二つあり、二階には六畳、四畳半、三畳の三部屋があった。一階の六畳は食堂兼会議室兼おもな管理者であった会員石堂清倫の寝室にあてられ、階上の六畳は西田信治、内垣安造、森静雄が常連で、亀井勝一郎や鹿地亘が比較的短期間同居した。谷中清水町の合宿所もまた二階建てで、階下は会合、寝室、食堂がおかれ、階上は宿泊者たちの勉強部屋になっていた。残された記述からは各部屋が機能に応じて分けられていたとは判別しがたい。ただ食堂や会議室、勉強部屋という語彙から、下宿よりは寄宿舎に類似した使用をしていたことがうかがえる。

さらに、個々人に確保されたスペースを確認すれば、寝室として使った部屋は数人が同時に使用したことも記述され<sup>(22)</sup>、幹部とヒラとで部屋が別れていたことも回想されている<sup>(23)</sup>。個人の使用というよりは、会で担う仕事に応じて部屋に割り当てが行われたことが予想される。

こうした合宿所は全ての会員を収容したわけではなく、近隣に自宅があるものは合宿所に通っていた。ただし、合宿所に入居した会員の多くは、大学入学後に入居した同郷寄宿舎やキリスト教青年団体といった修養の寄宿舎から移転してき

ている<sup>(24)</sup>。合宿所は地方から上京してきた労働運動の活動家たちの無料宿泊所も兼ねる場合があったが、常時滞留することが許されたのは会員たちであった。さらに会員中には既婚者も含まれ、彼らはそのパートナーとともに別の個所に住んでおり、入居は独身者に限定されていた。しかし、かといって独身会員らとの交渉が断たれたわけではなく、しばしば互いに来訪している<sup>(25)</sup>。卒業し既婚した元会員宅も会員たちの集まる場所となっていた<sup>(26)</sup>。またその例外として賄いを担う女性たちがあったが、これらは会員の母親や妹などといった血縁者が担っていた。

興味深いのはこうした下宿が表札を掲げていたことである。しばしば彼らは家探しの苦勞を語っている〔新人会 1920「地下室より」『先駆者』第4号〕。家探しで騙されそうになる、学生という理由でことわられる、高い料金をふっかけられるなどである。そこからは、彼らが「合宿所」にこだわっている様子がうかがえるが、そうして得た家屋に、桜木町の合宿所は林房雄、森川町は石堂清倫、谷中清水町は大間知徳三の名前を出していた。表札は苦難を乗り越え家屋を手に入れたという彼らの自負が具象化されたものと捉えることができる。

だが、新人会が関与した亀戸セルロイド工たちの労働組合の組合員が1923年の関東大震災の罹災直後に虐殺され、さらに1925年には非合法に結成された日本共産党のあぶり出しを目的にした京都学連事件において新人会は会員4名が検挙されることを経験している。表札を掲げたうちの一人、石堂に寄れば森川町合宿町の最初の来訪者は本富士署の太田刑事であった。太田は毎日この合宿所に来訪し、彼らの動向を観察していたという〔石堂 1986〕。

この表札を掲げた者の仕事は食費など経済的な側面を含めた合宿所の運営、管理であった。だが、彼らはしばしば新人会の活動および同時に所属した別の団体の活動も同時に従事し、ときには長期にわたって合宿所を離れることもあった<sup>(27)</sup>。そのため、管理はしばしば自分たち自身に委ねられた。そうした例として、アルコールに対する反応が挙げられる。

会員の一人で後に作家となる中野重治は、桜木町の合宿に入居したてのころのに、外出して飲酒し、帰宅するさいに「そっと塀を乗り越えて」いたことがしばしば言及される〔中平他 1954〕。そうした中野に対して中野は「真面目な顔でくだをま」くのだが、応対した二本は「からかうように」相手をしていたことが記憶されている〔片山 1969：215〕。「くだをまく」酔っぱらいの対応は面倒なのであるが、彼らはそれを忌避してはいない。そこには飲酒への嫉妬を見ることが出来るが、後に中野は外出しての飲酒を控えるようになる。むしろ「くだをまく」中野の姿には、飲酒を説明しなければならない気配が合宿所内部にあったことがうかがえる。それは明文化された規則ではなく、部屋の使用形態や生活の中で繰り返される行為からむしろ彼ら独自の規律が作られていったと推察される。

新人会の入会要件<sup>(28)</sup>や部屋の使用法、割りふり、そして批判される行為といった合宿所の規制と代表者の関係からは、合宿所を運営していくために彼らなりの秩序が作られていたことがうかがえる。こうした規則は代表者と強い関連性をも

たせないという点で、これまで見てきた寄宿寮などとは異なるものといえる。さらに、そうした秩序を維持することは彼らが社会的に危険な人物ではないとアピールすることになる。なぜなら、彼らの住居は従来捉えられてきた空間とは異なり、集合生活の猥雑さからは離れるよう意識されていた。表れは彼らが自らの正当性を社会に訴えるものとして捉えていたと理解することができる。

#### 4-2. 身体化の場所——知識人・帝大生・ホモソーシャルな共同体

新人会員らの社会的属性は東京帝大の学生である。そのため大学に通い、講義を受けることが日々課せられた日常の課題であると考えられる。だが実際、彼らが大学の講義に積極的に通ったという記述は決して多くはない。中には毎日大学に通いつつも、合宿所に近い裏門から入り、教室にはいかず第二学生控え所に直行し、そこで活動のためのポスター作りや新人会が主催する研究会に参加していたと回想する者もいる<sup>(29)</sup>。むしろ、しばしば彼らに語られるのは合宿所でどのようなことを見聞したか、経験したかという点である。では、合宿所において彼らは何を経験したのであろうか。彼らに経験された語りの中から彼らが住宅に込めた意味を検討したい。

第一に合宿所は会員以外の人々が集まる場所であった。原則的に合宿所は賄いを引き受けた会員の親族の女性のみが会員以外に滞在を許されたが、他方で来訪者が多く訪れていた。それは先にふれたように本富士署の刑事を始め、労働組合や農民組合の関係者、そして彼らが組織した学生社会科学連合会で東京市以外の地で活動する学生生活家である〔石堂 2001〕。また、高校卒業後、帝大進学と同時に新人会の合宿所を目指して上京した者もいる。こうした人々は会員がマルクス・レーニン主義に基づいて社会改良を目指す学生の全国組織を結成し彼らの知名度が高まった後の来訪者である。来訪者にとって会員らが住む合宿所は宿であると同時にある価値観に基づいた空間であったと推察される。

とりわけ会の草創初期においては帝大の教官である吉野作造や森戸辰男をはじめ、当時著名な社会活動家であった賀川豊彦、日本における社会主義の普及を目指し論壇を飾った堺俊彦や山川均といった社会主義者たちが訪れている。こうした人々の来訪は「燦然と来てくださった」と機関誌上で語られるほか、同誌上においては彼らの論考は称賛を持って批判、検討、紹介されていた<sup>(30)</sup>。さらに「打ち砕いた心持で腹の底を語り合えるのは嬉しい」とつぶられた。合宿所には彼らにとって憧れの存在が訪れる場所でもあった。

以上のように合宿所に人々が集まったという経験を見てみれば、合宿所は彼らが独自に開発したサロンとしての機能を有していた。

上記は合宿所がもった対外的な機能といえるが、会員が共同生活を送る中で生じた意味があったことも別の記述からうかがわれる。ここでは彼らが合宿所で行ったとされる読書を中心とした研究会に着目したい。その形態は共同研究と個人研究とに分けられる。

たとえば、会員たちは彼らだけが参加する自主的な研究会を合宿所内で催した。日中は労働争議の応援や指導に出かける必要があったため、一日の仕事が終わった夜にそれに参加することになる〔石堂 1986〕。

そうした研究会では講師を招いて指導を受ける、もしくは他者を指導するといったものではなく、指導者という立場をその折々にかえながら、同じ立場で学び合うという姿勢がもたれていた。石堂は合宿所で催された研究会でレーニンの『国家と革命』のテキストにおいて「技術」の解釈について語源的な意味までさかのぼったが解釈が出ず、その中で中野重治の解釈が明確で一同満足したことがあったことをつづっている〔石堂 1986〕。そうした経験に対して、同時期に合宿所で生活した中平解や山口忠吉は新人会時代を振り返る座談会で「新人会でいろいろな議論をしたり話を聞くのはよろこびでしたよ」や「フレッシュな感じでした」と語っている〔中平他 1954〕。合宿所での研究会は会員たちの知的好奇心を満足させる機能があった。しかも、そうしたテキスト理解を共有することは彼らに連帯感を抱かせる効果もあったといえるだろう。合宿所の外部、大学でも彼らは研究会を開催していたが、合宿所での研究会での経験を積むことによって会員たちは情報量の多さと発言の内容によって他の学生に対し、一段有利にふるまうことが可能になった。

他方で、共同生活をしながら個人研究がおこなわれたことも回想録からはうかがわれる。昼夜を問わず一人で行われる読書の姿は他の人々から驚きと称賛を持って記憶され、「のぞいたこと」はなかったが、何をしているかは了解されているように、その姿は隠されるものではなくむしろ積極的に開示されていた。

勉強部屋は真夜中でも誰かが読書にふけていた。電燈の消えることは殆どなかった。ここでは一切口をきかず、話があれば下に降りるといった風で、この一言をもっても当時どんなに真剣に勉強したかがうかがわれるのである。(野田弥三郎「若かった日の思い出——新人会時代を中心にして——」『東京帝大新人会の記録』1967：186)

大間知、山添、中野は奥座敷にいて、私などはその間をのぞいたこともなかった。彼ら先輩が何をしているかもしれなかったし、知ろうともしなかった。私らは玄関左側の部屋に机を並べて勉強していた。そこで、中野がゴーストへの手紙を訳していたし、あるとき鹿児島出の是枝恭二が飛び込んできて『資本論』三巻の下を持っているやつはいないか、地代論のところがみたいというので、私のそれを貸したのをおぼえている。(片山睿 1967『東京帝大新人会の記録』：214)

さらにこうした姿を見ることによって前述した野田は研究への意欲がわいたことが記されている。彼らが振り返る研究のスタイルは、そのスタイルに差異はあ

れど、合宿が心身を鍛え、研究者としてのライフスタイルや身体を得る鍛錬の場として機能していた点で共通している。1920年代の帝大生は従来の学問同様多くのテキストを読み、とりわけマルクス主義のテキストが必読書となってきた。新人会はそうした傾向を生み出す中心的存在であった〔永嶺 2007〕。そうした読書の傾向を加味すれば、読まれるテキストはこれまでのものとは異なっているが、彼らは帝大生としての姿を作りあげる場として合宿所を用いていたといえる。

前項で確認したように、彼らは部屋を目的別に分けて利用し緊張感の漂うものであったが、同時に合宿所は他の会員との間で友情をはぐくむような一場面もあったことが回想されている。あるものは合宿所から大学に通学し、またあるものは労働学校や労働争議に出かけた。生活のために翻訳などのアルバイトもする必要があり、その作業も行っていた。そうしたあわただしい合宿所の生活の中で一緒に風呂に出かけたり、お茶を飲んだりといった瑣末な出来事がそうした生活にコントラストを与えた。

おとなしい川口がよく私を風呂に誘ってくれ、帰りに豆板をかってきて熱い茶をすするのが、あわただしい合宿生活の中のおだやかなひと時だった——もっとも合宿の中の空気はぎすぎすとしたところは全然なく、なごやかではあったが、あんまり落ち着きがあるわけではなかった。〔片山 1967『東京帝大新人会の記録』：215〕

林（林房雄—引用者註）は料理を作るのがうまかった。ぼくたちも林の指導でパンの粉をくずしてコロケをつくって食べたが、うまかったよ（笑）〔中平他 1954〕

前項でふれた禁酒を含めて、日々の営みの中で彼らは彼らなりの秩序を作り上げていた。合宿所は生活の共同性によって、彼らの連帯を作り上げる機能があったと理解できる。しかも、彼らが在籍した帝大が男性のみの集団であり、合宿所もまた主に男性で構成されていた。ここでは主題と外れるため十分に展開できないが、既婚者が別に居を構えたように彼らの共同性は徹底的にホモソーシャルな関係であることを前提に運営されたことは合宿所の特徴として明記しなければならない<sup>(31)</sup>。

## 5. むすびにかえて

東京市下において学生たちが行動できた範囲は限定的であった。たとえば、今の観察によれば、1920年代の学生たちが他に比べて多く出入りした地域は浅草、神楽坂、上野であった。また、彼が学生たちに言及するのはカフェとの関連である。大学が林立した神田神保町では映画好きな学生を見込んで店名をつけられ、

学生たちが客と見込まれた。アルコールも扱うカフェに学生たちは出入りしていたが、1929年に丸山警視総監によるカフェ弾圧がおこなわれ、同年9月、銀座のイナイナイバーでは「学生服学生帽の御方は不本意ながらお断り候」〔今 1929：281〕と掲示され、学生の出入りが禁止されたという〔今 1929 a, 1929 b〕。

それぞれの土地が引きつけた学生は異なるにせよ、今が観察しえたということからは、学生たちの行動範囲が、限られていたことがうかがえる。

いま一つ忘れてはならないのが、治安維持法と大学の自治との関係である。1920年代から30年代にかけては人々の権利意識が高まり、さまざまな社会的属性の人々が多様な方法で表現し始めた。担い手となったのはジャーナリストや大学教授陣であり、そして学生たちであった。当時の大学は大学の自治を掲げ、国家権力といえども大学構内への侵入は物理的にもはばかれるというのが大学関係者の共通認識であった。学外での講演会は「弁士中止」を叫ばれ、そもそも開催できないことも多かったが、学内においては教官のサイン一つでたいていの集会が開けた。彼らは新会員の獲得や学内での意識変革のため毎日一度は大学の中で講演会や勉強会を開催していた。だがそれも、1925年の治安維持法以降崩れ、大学もまた戦時下体制へ協力していく。大学という空間や学生という社会的属性は戦争の目的において、大学が持っていると思なされた規制を無効化する力をはく奪されていく。

本稿で見てきたように、新人会員らは合宿所において様々な活動を行ってきた。そこからは彼らが旧制高校時代に身につけた習慣を利用しながら、東京市という都市や社会状況の下、彼らが自由にふるまえる空間を確保することが目指されていたことがうかがわれる。目的を同じくする人々と共に住むことで、知識人に近い帝大生として自己を規律する、学生モデルを作り上げることが目指されたのが合宿所であった。

そこには、大学という空間が制限されることによって学生たちに許された行為が制限され、行為を確保するために合宿所という空間が求められていたと理解することが指適できる。そのため、合宿所は会員らの活動を保証するアジトとしての機能を後に負うことになった。そして、本富士署の刑事の来訪が端的に示すように、それゆえに彼らの活動を追いやる空間でもあった。新人会の合宿所は、学生たちが時代状況や都市とどのように向きあったのかを表す1つの例といえるだろう。こうした、時代状況と都市との関係は学生らの活動選択にどのような影響を与えたのか、とりわけ関東大震災後に新人会が中心となったセツルメント事業はその好例と考えられる。この論点は今後の課題としたい。

#### 【註】

- (1) 江戸末期などに医術の習得のために進学することが考えられるが、郷里に戻って施術することが原則であったと推察される。今日進学を理由にする別離は、その後の職業選択によって出生、生育した土地を離れることも少なくない。土



地と切り離された別離は明治期以降に始まったと考えられる。また、将来の職業訓練のための丁稚や子守といった親元からの独立はここでは扱わない。

- (2) この視点は今による〔今 2001b〕。
- (3) 今日、日本において社会科学をマルクス主義と置き換えたという見方が定着している〔市野川容孝 2006〕。活動後期ではマルクス主義、共産主義の研究と実践を活動目標としたが、その普及のため東京帝大内部にのみならず、他大学、さらには高等学校などを含めた全国組織を組織した。このことを重く見た政府、文部省では彼らの活動を解散させた後、高等教育機関で数多くの学生生活調査を行うようになった。
- (4) 「左傾学生群の肖像を描くことを試み」た竹内もまた、学生生活調査を資料にしている。竹内は左傾学生貧困説を退ける分析を行うなかで、左傾学生たちの学業成績、健康状態、府警の職業や家計状況に着目し、より詳細な学生像を把握することに成功した〔竹内 2002〕。
- (5) 学生生活調査の導入理由は註3を参照。
- (6) 加藤は学生の音楽の愛好スタイルに着目し、「音楽」をめぐる学生の愛好の質的变化を明らかにした。加藤が調査した学生生活調査は以下のとおりである。

表1 高等教育機関が行った学生生活調査

1930	「東京帝国大学 学生生計調査報告」東京帝国大学学生課
1930	「生徒生計調査報告」『長崎高商研究館彙報』第16巻第1号長崎高等商業学校研究館
1932	「学生学園生活統計」神戸商業大学学生課調査
1934	「学生生活調査報告」東京商科大学豫課 学生主事室
1935	「生徒生計調査報告(第2回)」『長崎高商研究館彙報』長崎高等商業学校研究館
1935	「東京帝国大学 学生生活調査報告」東京帝国大学学生課
1935	「生徒生活調査書」和歌山高等商業学校
1936	「山口市学生生計調査書」山口高等商業学校東亜経済研究所
1934	「学生生徒生活調査報告」北海道帝国大学
1936	「生計調査報告」第二高等学校生徒課
1936	「学生生徒の生活に関する調査」文部省思想局『思想調査資料』第32集
1937	「第5回 生活調査報告」第二高等学校尚志会共済部
1937	「東京帝国大学 学生生活調査報告」東京帝国大学学生課
1939	「立教大学学生生活調査報告」東京帝国大学学生課
1942	「第6回 生活調査報告」第二高等学校護国尚志会生活部
1984	『旧制高等学校善処』第7巻(2)旧制高等学校資料保存会
	文部省「学生生徒生活調査」1938調査

- (7) 滝浦の復刻に携わった教育学者齊藤利彦は、滝浦の著作以前に寄宿舎に関する研究として以下のものがあったことを指摘している。教育学者武本富の学位論文(1905)、長谷川音彦他『中等学校寄宿舎研究』広島高等師範学校教育研

研究会編（1908）、山本良吉『中学研究』（1908）〔滝浦 1926：解説4〕。

- (8) 今に分類された特徴は次の通りである。すなわち「動く東京」、「享楽の東京」、「遊覧の東京」、「生活の東京」、「細民の東京」、「学芸の東京」である。
- (9) 1929年、東京市内において次のような大学が林立していた。早稲田大学、慶応義塾大学、明治大学、東京商科大学、東京文理科大学、東京工業大学、中央大学、日本大学、法制大学、国学院大学、戦国大学、立教大学、拓殖大学、立正大学、駒沢大学、東京農業大学、東京慈恵会医科大学、日本医科大学、大正大学。
- (10) 間借り自炊及び室借り食堂通いは、部屋だけ借り、建物にある台所で食事を作る者が自炊、食事を外で済ませざるを得ない者が食堂通いである。そこには下宿にしろ貸間にしろ学生一人、二人では採算が合わないという提供者側の理由、学生にとって食費を入れると高くなるといった学生側の事情、そして食堂が増えたという外在的な変化があった。これらは他方で情味がなくなる点がけねんとして滝浦に看取されている〔滝浦 1926〕。
- (11) 書生として住み込み、労働力を提供することを見返りに、部屋を借りるような住居を貸間と呼んだ。学生側からは仕事を命ぜられ呼びつけられることは人格を否定された気分になること、家主側は書生の扱いに難しさがそれぞれ感じられていた。夜学や通信教育の発達によって労働力を提供し間借りする必要性がなくなり、その数は減少しつつあった。こうした状況の中、篤志の過程が2・3人の学生を同居させ、利得を離れて彼らを遇し、家庭の一員として扱う家庭寄寓が今日求められていると滝浦は述べている〔滝浦 1926〕。
- (12) 通学圏内に実家などのある者や学生数の増加による収容人数の不一致、入寮拒否者などがいたことがその理由であった〔一高同窓会 1994〕。
- (13) 滝浦が確認した寄宿舎は27を数え、その一例をあげれば同志社、尚志社、信陽社（長野県）、庄内館（山形県）、埼玉学生誘掖会（埼玉県）がある。
- (14) 修養寄宿舎は全国の高等学校におかれた。一例をあげれば、知四明寮（京都）、道交会（仙台）、求道学者、真心寮（ともに東京）、八高誠明寮（名古屋）が仏教系の寄宿舎であり、キリスト教系ものは二（仙台）、三（京都）、四（金沢）、五（名古屋）、六（熊本）、新潟高校などをはじめ、各大学におかれた。
- (15) キャプションは「風紀点検委員による不時点検」〔一高自治寮百年委員会 1994：371〕。
- (16) 設立の早いナンバースクールから地名を冠された高校までこうした例が挙げられる〔山形高等学校学寮史編纂委員会編 1938、第四高等学校時習寮寮史編纂委員会編 1948〕。
- (17) 1886年9月29日付通達によって、東京帝大は全学の1年生に、公内に設置された大学公認の寄宿舎、もしくはそれに準ずる公認寄宿舎に寄宿すべきと定めた。しかし、その実体は開始当初から約半数を満たすことが出来なかった。寄宿舎には1881年以降、専任の舎監がおかれ、入舎生管理の規則に基づいた事務

を行った。その権限は大きく、寄宿舍だけではなく講内全域におよび、在舎生のみならず全学学生生徒に及ぶとみなされた。その目的は高等教育機関在学生の政治参加を抑止し、不品行や無作法などの「風俗之弊」を強制しようという、文部省の方針に基づくものと推察されている。他方で、同時に学科・学級を単位として舎内に部を設け、投票により「部幹」を選出し、部内の秩序維持と各部の利害代表の責を負うようになり、多少の自治が許されるようになった。しかし、寄宿舍それ事態が1901年に医学部の拡張によってその敷地を没収され、キャンパスが別地されていた農学部以外、寄宿舍はなくなってしまう。以降、1923年に学生が住宅困窮に陥った関東大震災まで、大学は本郷のキャンパス構内に寄宿舍を置くことはなかった〔東京大学百年史編集委員会編 1984, 1985〕。

- (18) こうした語りは枚挙にいとまがなく、各学校が寮史を記録したものには繰り返し現れる文法である。
- (19) このことは『第一高等学校自治寮六十年史』による〔一高自治寮立寮百年委員会 1994 : 332〕。
- (20) たとえば、草創期に活動したのちの経済学者松沢兼人はインタビューや回想録で繰り返し強調している〔慶応義塾大学法学部政治学科中村勝範研究室編 1983〕。戦前戦後の通史的視点から思想史を分類した鶴見らによってこうした理解は現在広く広まっている〔思想の科学編 1959〕。
- (21) 関東大震災罹災時に被災者救援を行った者を中心に、貧困地域に居住し知識の分与と状況の改善を目的に設立された事業である。本所柳島町に開かれた。セツルメント事業の理念には居住することが盛り込まれ、住み込んで働くものをレジデント、通いで働く者をセツラーと称した。こうしたセツルメント事業には少なくない会員たちが参加している。
- (22) 島野武 1967『東京帝大新人会の記録』：165, 経済往来社。
- (23) 片山春 1967『東京帝大新人会の記録』：214, 経済往来社。
- (24) 概して金沢に置かれた第四高校の出身者は、まず県レベルで設置された同郷寄宿舍に入居する傾向があった。たとえば、新明正道は石川県の寄宿舍から高田村へ、福井県出身の森山啓や中野重治は輔仁会という福井県の寄宿舍に上京後、入居し、そこから森川町の合宿所に移転している。また修養寄宿舍である帝大基督教青年会もまた、会員たちの入居先でもあった。草創期の会員に多く、かれらはここから高田村へ転入、もしくはそこから本部へ通った。
- (25) たとえば、草創期の会員でのちの経済学者服部英太郎の妻美代は、夫婦が世帯をもった根津須賀町から英太郎が買いの活動に参加したことを記憶している〔大友福夫編 1967〕。ほかに、のちの仏文学者中平解は、おなじく会員で一高時代からの親友であった中井精一の椎名町五郎窪の新婚宅に一時同居し、会友が訪ねてきたことを回想している〔慶応義塾大学法学部政治学科中村勝範研究室編 1984〕。

- (26) たとえば会員でのちのジャーナリスト大宅壮一は卒業して夫人とともに住んだ目白の自宅が研究会の場であったことを回想してい」る〔大宅壮一 1981〕。
- (27) たとえば、谷中清水町に表札をだした大間知は浜松の日本楽器労働争議に参加するため半年近く合宿所を離れている。
- (28) 新人会は1923年以降、東京帝大の在校生のみの団体へと組織を変化させた。当時帝大は男性しか入学できず、また、大学の進学率も10%に満たなかった。そうした状況の中で帝大に入学し、活動の趣旨に共鳴する者が任意で入る集団が新人会であった。
- (29) 島野武 1967『東京帝大新人会の記録』：164、経済往来社。
- (30) 新人会 1920「新人会記事」『先駆』第4号。
- (31) この視点はイブ・K・セジウィク〔1985=2001〕による。

## 【文献】

- 朝日新聞「巡查合宿所のボヤ」1927年7月7日  
 ——「朝鮮人の大乱暴／合宿所を襲い器物破損」1929年1月3日。  
 ——「合宿所の賄い方でコレラ」1929年9月7日。  
 第四高等学校時習寮寮史編纂委員会編 1948『第四高等学校時習史』第四高等学校時習寮。  
 初田亨 2004『繁華街の近代』東京大学出版会。  
 福島正夫・石田哲一・清水誠編 1984『回想の東京帝大セツルメント』、日本評論社。  
 市野川容孝 2006『社会』岩波書店。  
 一高自治寮立寮百年委員会 1994『第一高等学校 自治寮六十年史』一行同窓会。  
 石堂清倫 1986（→2001 a『わが異端の昭和史』上。平凡社ライブラリー）。  
 ——1990（→2001 b『わが異端の昭和史』下。平凡社ライブラリー）。  
 今和次郎 1929 a（→2001『新版大東京案内』上ちくま学芸文庫）。  
 ——1929 b（→2001 b『新版大東京案内』下ちくま学芸文庫）。  
 ——1971『考現学』今和次郎集 第一巻、ドメス出版）。  
 加藤善子 1999『学生生活調査に見る学生の音楽愛好——「音楽」の内容と愛好の質的变化——』大阪大学教育学年報第4号：19-32。  
 慶応義塾大学法学部政治学科 中村勝範研究室編 1983『東京帝国大学新人会研究ノート』5、慶應義塾大学法学部政治学科中村勝典研究会。  
 ——1984『東京帝国大学新人会研究ノート』6、慶應義塾大学法学部政治学科中村勝典研究会。  
 Keniston, Kenneth 1971 Youth and Dissent: The rise of a new opposition, Harcourt Brace Jovanovich.=1977 高田明彦・高田素子訳『青年の異議申し立て』、東京創元社。  
 前田俊一郎 2002『都市における青年と故郷——寄宿舍・学生寮に見る同郷者

- 結合を中心として——」119-160 松崎憲三編 2002『同郷者集団の民俗学的研究』岩田書院。
- 森岡清美 1992 (→1995『決死の世代と遺書——太平洋戦争末期と若者の生と死——』補訂版, 吉川弘文堂。
- 中平解他 1954「小説『むらぎも』と新人会時代」『中央評論』: (36)76-86。
- 永嶺重敏 2007『東大生はどんな本を読んできたのか——本郷・駒場の読書生活130年』平凡社新書。
- 大友福夫編 1967『社会政策40年——服部栄太郎栄太郎博士追悼・遺文集——』未来社。
- 大宅惣一 1928「林房雄の印象」『新潮』9月号 (→1981a「林房雄の印象」『大宅杜一全集』第1巻: 326-332, 蒼洋社)。
- 佐藤得二 1939「寄宿舍」河合栄次郎編『学生と学園』日本評論社。
- 新人会 1919『デモクラシイ』。
- 新人会 1920『先駆』。
- 新人会 1920-1921『同胞』。
- 新人会 1921『同胞』。
- 思想の科学研究会編 1959『共同研究 転向』上, 平凡社。
- 末富芳 2007『貧乏帝大生はどれくらいいたか? 昭和初期学生生活調査における「苦学生2割5分説」の検証』第59回日本教育社会学会報告原稿(於茨城大学)。
- 高田知和2006「近代日本の学生寮についての研究——三つの視点から——」。
- 『東京国際大学論叢 人間社会学部編』第12号: 41-55
- 竹内洋 1991『立身苦学出世——受験生の社会史——』講談社現代新書。
- 2002『「左傾学生」の群像』稲垣恭子・竹内洋編『不良・ヒーロー・左傾——教育と逸脱の社会学——』: 27-59, 人文書院。
- 滝谷文彌 1926『寄宿舍と青年の教育』(→1993『寄宿舍と青年の教育』日本教育史基本文献・資料叢書22, 大空社)。
- 東京大学百年史編集委員会編 1984『東京大学百年史』通史一, 東京大学出版会。
- 東京大学百年史編集委員会編 1985『東京大学百年史』通史二, 東京大学出版会。
- 東京大学百年史編集委員会編 1986『東京大学百年史』資料三, 東京大学出版会。
- 東京市区調査会編 1912『東京市及接続郡部地籍地図』東京市区調査会。
- 山形高等学校学寮史編纂委員会編 1938『学寮史』山形高等学校学寮史刊行会。
- 読売新聞「合宿所で巡査と娼妓の心中」1923年7月16日。
- 「三千余円の鉄道合宿所あらし」1925年6月4日。